思いつくままに

都築　俊文

学生時代の私はほとんどがウマに係る毎日で、朝は 5 時起きの練習、授業が終わると馬場の整備、青草刈り、乾燥作りなどの肉体労働に明け暮れる日々でした。馬乗り仲間では“馬屋七部に乗り三部”と言って、馬にまたがる時間に比べ作業時間の方が圧倒的に多いことが常識なのです。特に当時の畜産大学のような貧乏大学の馬術部では、馬の飼育から飼料調達までほとんどを学生部員が行わなければなりません。そんな訳で、体力にはいささか自信を持てるようになりましたが、学問に関しては推して知るべしで、教養時代は留年を逃れる程度の勉強が精一杯でした。ただし、研究生活に対する憧れのようなものだけは抱き続けていましたので、専門課程は尊敬する藤野先生の食品化学教室を選びました。先生は日本農学賞、農芸化学賞などを受賞された著名な農芸化学者でしたので無謀ではありましたが、少しでもアカデミックな雰囲気に接してみたい一心で選択しました。幸い、先生はスポーツにも理解を示して下さり（？）、遠征試合の多い私にも実験可能な卒論テーマを下さいました。概要は、国内外における菜種油の栄養評価が目的で、種蒔きののち登熟期までの菜種を採取し、各段階での構成脂肪酸の変遷状況を薄層クロマトにより分析するものでした。

昭和 39 年の秋、藤野先生から道衛研で温泉分析を担当する職員を募集している話を伺い、一も二もなく応募することにしました。その年の暮れに多賀先生が当時の北大教養部に転出される後任探しのため、中谷先生が体力のありそうな若者を捜されていたようです。

昭和 40 年 4 月、道衛研 薬学部鉱泉化学科に勤務することになりました。当時、温泉水の重金属分析は、銅、鉛などジチゾン錯体を異なる pH 条件下で四塩化炭素抽出し、比色分析するものでしたが、ほどなく道内では豊羽鉱山にしかなかった原子吸光光度計が導入されました（Perkin Elmer 303）。ただし、分析結果の算出を手回しの計算機で行っていた時代であり、“原子吸光”という言葉自体に全く馴染みが無かったこともあって若い私が担当することなり、何人かの先輩が見守るなかで緊張して分析したのを思い起こします。

入所翌年には中谷先生のお勧めで当支部に入会しました。最初に出席した総会では、青村、神原、西村、蟇目、本多、松前先生など居並ぶ偉い先生方のやりとりを呆然と見守っていたこと、氷雪セミナーの夜の部では、先の大先生たちも裃を脱いでバッカスの恵みを存分に享受し、若者達をも含めた心と心の触れ合い、温泉での裸と裸の付き合いも深まり、支部独特の融和の原点をここに見る思いがしました。また、分析化学の基本を学ぶべく北大理学部神原教室での読書会に参加させて頂き、長谷部、大関、斎藤、片岡、菅原先生らと面識をもつこともできました。

昭和 57 年 2 月に支部設立 25 周年祝賀会が厚生年金会館で開催された折、数名の先生方の奥様も参加され、華やかな彩りを添えられた記憶が残っています。

時代の推移とともに、会の素晴らしい伝統は藤本、那須（義）、吉田、多賀、那須（淑）、渡辺、斎藤先生らに、そして現役のリーダー達に脈々と継承されています。

この間、私も支部長ほか幾つかの役割を仰せつかる中で、諸先生とのコンタクトもでき、

学問以外の経験も積むことができました。

とりわけ、平成3年の「水の分析 第4版」の編集にあたり、編集委員長である那須（義）先生の部屋で多賀、川村先生と 4 人で過ごした時間は忘れ得ぬ思い出の一つです。那須先生はいつも穏やかな口調ながら積極的にイニシアテイブをとられ、用意された膨大な資料に沿って自由闊達な意見交換が楽しい雰囲気の中で行われました。そんな先生がその年の暮れに突然入院され、翌春 4 月に他界されてしまいました。柱を失った我々にとって正に痛恨の極みでした。

平成6年の2月、多賀、川村先生、そして後から編集委員になられた田村、田中先生ともども完成した本をご慰霊の前に献本させて頂きに参りました。淑子先生の温かなおもてなし、帰宅されていたお嬢さんのピアノにあわせ、川村先生が自慢の喉を聞かせて下さったことなどを懐かしく思い起こします。

このように、浅学非才な私ごときが当支部の活動を通じて多くの先生方と交流の機会をもつことができ、また多くの貴重な思い出を作ることが出来ましたことを大変有り難く思い、そして感謝の気持ちで一杯です。

最後に、50 周年を迎える支部が会員相互の理解と協力のもと、さらなる活力の向上と素晴らしい伝統を堅持されんことを心から祈念する次第です。

（北海道和光純薬㈱）